

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告

平成4年度

八千代市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成4年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫・県費の補助を受けて次の5遺跡を
確認調査した報告である。

- a. 正覚院館址・持田遺跡 村上1525-3 調査面積990.33㎡のうち98㎡ 原因 墓地造成
- b. 下船田遺跡 大和出新田字新木戸前8-1 調査面積2,994㎡のうち304㎡ 原因 宅地造成
- c. 菅地ノ台遺跡 益田4413 調査面積1,935㎡のうち246㎡ 原因 整地
- d. 桑橋新田遺跡 桑橋字井ノ下小谷津70 調査面積5,000㎡のうち500㎡ 原因 老人ホーム
- e. 高津新田野馬土手遺跡 八千代台南4 調査面積1,054㎡のうち40㎡ 原因 仮設道路

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 各遺跡の概要	2
1. 正覚院館址・持田遺跡	2
2. 下船田遺跡	4
3. 菅地ノ台遺跡	6
4. 桑橋新田遺跡	8
5. 高津新田野馬土手遺跡	10

挿図・目次

第1図 市内全域図	1	第9図 菅地ノ台遺跡基本土層図	7
第2図 正覚院館址・持田遺跡位置図	2	第10図 桑橋新田遺跡位置図	8
第3図 同 遺構確認状況図	3	第11図 同 遺構確認状況図	9
第4図 下船田遺跡位置図	4	第12図 同 基本土層図	9
第5図 同 トレンチ設定図	5	第13図 高津新田野馬土手遺跡位置図	10
第6図 同 基本土層図	5	第14図 同 現況測量図	11
第7図 菅地ノ台遺跡位置図	6	第15図 同 野馬土手土層断面図	11
第8図 同 遺構確認状況図	7		

図版目次

図版1 正覚院館址・持田遺跡	12	図版4 桑橋新田遺跡	15
図版2 下船田遺跡・高津新田野馬土手遺跡	13	図版5 桑橋新田遺跡	16
図版3 菅地ノ台遺跡	14		

第1章 調査に至る経緯 (第1図)

本市は東京への通勤圏として、開発等の増加が顕著となってきてから、大部たとうとしている。無用な文化財の忘失を未然に防止しようと、県教育委員会の指導のもと、文化財の所在の照会を行い、対処してきたところである。

調査した遺跡

正覚院館址・持出遺跡は91年9月に、墓地拡張のため、宗教法人正覚院より照会され、協議されてきた。隣接する東側も調査を実施しており、今回諸準備が整い、確認調査を実施した。

下船田遺跡は周知の遺跡範囲内であり、現地踏査によっても土器散布を確認した。協議を重ね7月確認調査を実施した。

菅地ノ台遺跡は、92年7月周知郷秀郎氏より既存建物の撤去及び整地のため照会文が提出された。隣接地は調査を実施しており、建物を撤去した後調査を実施した。

桑橋新田遺跡は、白井嘉恵子氏より老人ホーム建設のため92年8月に照会文が提出された。隣接地はかつて調査が行われていたので、協議により照会面積22,565㎡の内、今年度5,000㎡について確認調査を実施した。

高津新田野馬土手遺跡は、レランドミヤザキ株式会社より千葉市側の開発に伴う仮設道路として該地を削平したいと91年8月に照会文が提出された。市教委は保存する形で協議を重ねたがやむを得ず、92年12月に調査を実施した。



第1図 市内全域図

59桑橋新田遺跡 164下船田遺跡 179菅地ノ台遺跡
200・201正覚院館址・持出遺跡 251高津新田野馬土手遺跡

第2章 各遺跡の概要

1. 正覚院館跡・持田遺跡 (第1~3回、図版1)



第2図 正覚院館跡・持田遺跡位置図

設定等)、19~26日トレンチ試掘・実測作業とすすめ、29日器材撤収により、調査を終えた。

調査の概要 文化層は複数あるものと想定し、確認調査を実施した結果、古墳時代後期・奈良~平安時代の堅穴住居跡8軒、中世の堀跡3ヶ所、土壌2基を検出した。土壌のうち1基は地下式横穴かも知れない。

住居跡の覆土は、確認面での観察では、暗褐色土を基調とする。確認調査の限界性だが、カメラは1ヶ所において確認したのみである。

中世の堀跡と考えられる遺構は、当初ロームと思われた褐色土を確認した。細いトレンチを設定し掘り下げると、下に暗褐色土を確認し、再堆積であることがわかった。このロームは土塁を構築した際に築みあげられ、その後、削平・埋戻されたものではないかと思われる。なお、堀跡の幅は確認面で、1.5mを測かる。深さは未掘だが、ボーリングステッキが、底に届かないところから、1m以上あると想定した。

本遺跡の基本層序は、Ⅰ表土・攪乱層、Ⅱ黒褐色土、Ⅲ褐色土(新規テフラ層)、Ⅳローム漸移層、Ⅴソフトロームとなっていた。

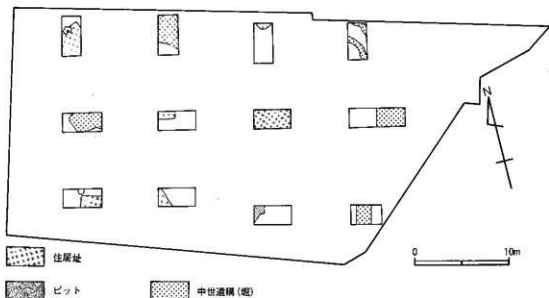
遺跡の立地と概要 本遺跡は新川東岸の村上地区に位置する、標高24mの舌状台地上に所在し、水田面との比高は18mを測る。

調査対象地は古代・中世の複合する遺跡であり、隣接する北側には舌状台地基部を切る形で、堀が観察されている。このため遺跡範囲は重複するが、包蔵地と館跡の2遺跡として、捉えている。

調査の方法と経過 調査区の形状に沿って10m方眼を設定し、それに基づいて2×4mのトレンチを設け、試掘した。

現況は竹林のため、表土除去は困難であったが、遺物・焼土・土質の変化に留意して掘り下げ、遺構確認に努めた。

92年6月17~18日調査準備(トレンチ



第3図 遺構確認状況図(1:400)

出土遺物 縄文式土器片(中期;加曾利E・後期;称名寺)が数点、出土した。また、古墳時代後期(土師器;坏・甕、須恵器;壺・蓋)の破片が多数、奈良・平安時代では(土師器、須恵器;坏・甕)が若干量出土し、中世は、土師質の鉢(摺鉢)や陶器の甕が少量出土している。また絹雲母片岩(武蔵型板碑?)片が、少量出土した。

古墳時代後期の土器では、口縁部内面にかえりが顕著な、7世紀前~中期頃のものであろう須恵器蓋片や、外面に稜を持つ丸底のもの、稜をもたない浅い皿状の土師器坏片が出土しており若干の時間差が考えられる。

調査のまとめ 当初の想定どおり、二枚の文化層を確認することができた。遺構については、6~9世紀代の集落址、中世館址を区画すると考えられる堀及び土塁(想定)を検出できた。以上の成果を踏まえて、今後の行われる本調査において、遺跡のより詳細な解明に努めていきたいと考える。

2. 下船田遺跡 (第1・4～6図、図版2上段)



第4図 下船田遺跡位置図

当初設定したトレンチにおいては、遺構が確認できなかったため、現地踏査の際に遺物が確認された地点に、集中的に捕捉トレンチを増してさらに遺構検出に努めたが、今回の確認調査においては、遺構は確認できなかった。

調査の概要 近世以降の溝状遺構を確認した。遺跡の基本層序は、Ⅰ耕作土、Ⅱソフトローム漸移層、Ⅲソフトローム層、Ⅳハードローム層となっており、耕作による削平が進んでいた。

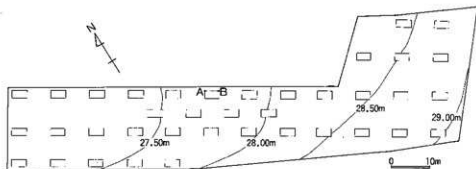
出土遺物 縄文式土器片数片(中期;加曾利E)が、出土したのみであった。

調査のまとめ 確かに今回の調査においては、遺構を確認することはできなかったものの、遺跡の古地上、遺跡の主体とされる地区は別であり、この対象区においては、遺構が希薄だったと考えられる。

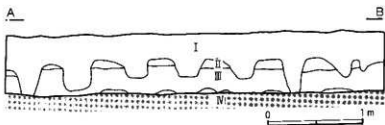
遺跡の立地と概要 本遺跡は新川の上流、高津川の奥部付近の谷津を望む北側台地上に立地する。標高は約27～29mを測り、調査対象地は東側で高く、西側へ低くなる地形状況を示している。

該地は下船田遺跡として周知の遺跡内であり、歴史時代の包含地として把握されていた。また現地踏査においても、若干の土師器散布を確認した。

調査の方法と経過 調査は調査区の状態に沿って、10m方眼を設定し、2×4mのトレンチを基本として試掘した。92年7月20日調査準備(トレンチ設定等)、21～27日トレンチ掘り下げ、28日実測作業とすすめ同口器材撤収により調査を終了した。



第5図 トレンチ設定図 (1:1,000)



第6図 基本土層図 (1:40)

3. 菅地ノ台遺跡 (第1・7～9図、図版3)



第7図 菅地ノ台遺跡位置図

東傾斜面部の竹林については、事業者との協議により現状保存とする旨決定されており、調査からはずした。

調査は、92年9月7～8日調査準備（トレンチ設定等）、9日表土除去（重機使用）、11～14日遺構確認作業、16日実測作業とすずめ、器材撤収により終了した。

調査の概要 以前の市内遺跡発掘調査事業及び千葉県文化財センターの調査の成果を踏まえ、確認調査を実施した。今回の調査において確認した遺構は、弥生時代後期以降の堅穴住居址7軒土壇4基であった。

この遺跡の基本層序は、Ⅰ表土（攪乱層）、Ⅱ黒褐色土、Ⅲ褐色土（新規テフラ層）、Ⅳソフトローム漸移層、Ⅴソフトローム層となっている。

出土遺物 縄文式土器片（後期；加曾利B）が数点、黒曜石の剥片1点、古墳時代中期（土師器；高坏等）数点、奈良・平安時代（土師器・須恵器片）が若干量出土している。

古墳時代中期の遺物では、滑石製有孔円板1点及び原石の小片が数点出土している。

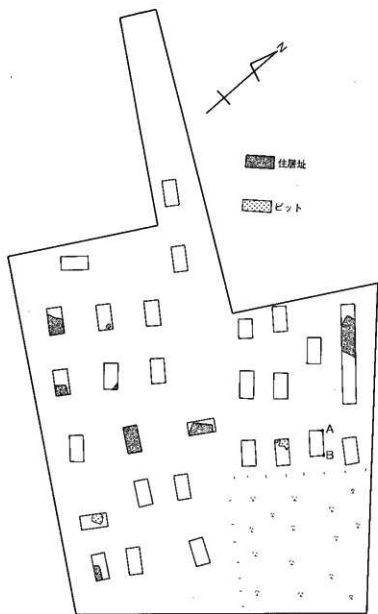
調査のまとめ 隣接調査区の成果を踏まえて、集落の広がり把握することに努め、それなりの成果を得ることができた。今後の本調査においては、遺構の時代・時的的な占地について資料

遺跡の立地と概要 本遺跡は新川西岸の菅田地区に位置する、標高約24mの台地上に所在する。水田面との比高は18mを測る。

今回調査区の南西に隣接した地区は、87・88・89年度に「市内遺跡」として、確認・本調査を実施しており、弥生時代後期～古墳時代前期の住居址3軒、古墳時代中期の住居址4軒、平安時代の住居址3軒、掘立柱建物址3棟分を検出した。また道路を越えた地区は、「菅田遺跡群（権現後遺跡）」として千葉県文化財センターが、調査を実施したところである。

調査の方法と経過 調査は、調査区の形状に沿って、全体を捕捉できるように2×4mのトレンチを任意に設定した。

を蓄積していきたい。



第8図 遺構確認状況図(1:150)

0 10m

A—

—B



第9図 基本土層図(1:60)

4. 桑橋新田遺跡 (第1・10～12図、図版4・5)



第10図 桑橋新田遺跡位置図

遺跡の立地と概要 本遺跡は新川の支流、桑納川北岸の桑橋地区に位置する、標高約20～24mの台地上に所在し、水面との比高は19mを測る。

調査対象地の南側の隣接地は、76年に桑橋遺跡として本調査を実施している。この時には、堅穴住居址(弥生時代後期4、古墳時代前期3、平安時代1)と、方形周溝墓(弥生時代後期4)を検出している。

調査の方法と経過 調査区の形状に沿って20m方眼を設定し、2×4mのトレンチを作成した。

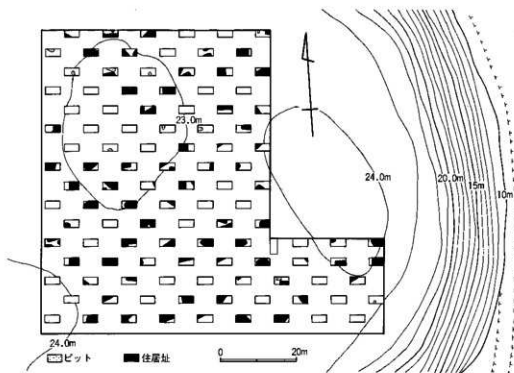
調査は、92年10月26日調査準備(トレンチ設定等)、28～30日重機による表土除去、並行して10月28～11月13日トレンチ掘り下げ、11月16～19日実測作業とすすめ、器材撤収により全作業を終了した。

調査の概要 今回は、弥生～古墳時代における集落と、方形周溝墓の展開に配慮して、調査を実施した。しかし確認した遺構は、堅穴住居址88軒(うち縄文中期～後期3軒)、土壇9基と予想を超えるものであった。

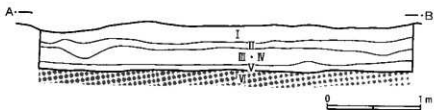
住居址覆土の確認面での観察では、古墳時代のものは黒褐色土を基調とするものであり、縄文～弥生時代については暗褐色土を早する。方形周溝墓について、四隅がブリッジ状の形態が81年の調査で明らかであり、その点留意したが、明確にすることはできなかった。

本遺跡の基本層序は、Ⅰ表土(攪乱層)、Ⅱ黒色土、Ⅲ・Ⅳ褐色土(新規テラフ層及下部層)、Ⅴソフトローム漸移層、Ⅵソフトローム層となっている。なお、Ⅲ・Ⅳの褐色土は、明確に言えば明褐色土と下層の暗褐色土に分けられる可能性があるが、視覚的分層では判然としないためⅢ・Ⅳ層とした。

遺構確認は基本的には、古墳時代以降の遺構については、Ⅲ・Ⅳ層上面、弥生・縄文時代については、Ⅲ・Ⅳ層下層乃至Ⅴ層において行なった。



第11図 遺構確認状況図 (1:1,000)



第12図 基本土層図 (1:40)

出土遺物 縄文式土器片 (早期; 茅山・前期; 浮島・中期; 下小野、加曾利 E・後期; 称名寺、堀之内、加曾利 B) が少量、弥生式土器片 (後期; 甕、壺等) が極少量、古墳時代前期土器片 (土師器; 碗、甕、壺、器台、埴、高坏等) が多量に出土し、平安時代について須恵器片が稀に出土している。

また、古墳時代前期の土玉が約10点、鉄滓が若干出土している。

調査のまとめ 今回は照会面積のほぼ程度を確認調査したにすぎないが、多くの成果を上げることができた。古墳時代前期の集落址を主体として、縄文時代早～後期に至る土器片の出土から、該期の遺構が少なからず検出できると思われる。また、鉄滓の出土から鍛冶遺構も想定できる。来年度予定される確認調査により、更に具体的資料が追加され得ると考える。

5. 高津新田野馬土手遺跡 (第1・13~15図、図版2下段)



第13図 位置図(1:10,000)

遺跡の立地と概要 本遺跡は足太川最奥部の南岸台地上に立地する。標高は26mを測り、水田面との比高差は6mである。

該地は本市域に残る数少ない野馬土手であり、保存措置を考慮しつつ、協議を重ねた。しかし記録保存ということになり調査を実施せざるを得なかった。

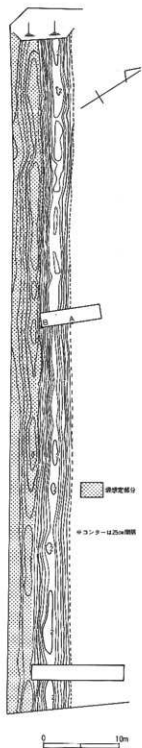
調査の方法と経過 調査は上手に直交する方向で、トレンチを2本設定した。堀については、現況において測量を済ませており、土手部分を重点的に調査することとした。

調査は、92年12月3～5日にかけて実施した。3日重機によるトレンチ掘り下げ及び土手断ち割り、4日トレンチ内精査、5日実測作業等により調査を終了した。

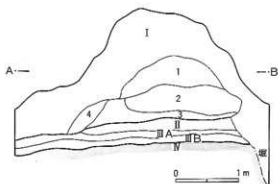
調査の概要 野馬土手の構築状況と、土手の外の遺構(堀等その他の遺構)に重点を置いて、調査を実施した。トレンチを掘り下げた結果、当初想定していた土手の外側に、堀は確認されなかった。野馬土手の両側に堀があったのではなく牧内のみ堀が存在することが確認できた。

上手の構築状況は、旧地表を整地・版築し、基礎部分とする(第Ⅱ層上面)。堀を掘削し、排土を第Ⅱ層上部に積み上げる(第2・3層)。更に第4層を貼りつけて、積み上げ上の補強とする。最後に整地した際の表土を上に乗せる(第Ⅰ層)。第Ⅰ層は、木根による攪乱層であるが、頂上部分に、大木の木根が遺存しており、本市側の表土を削って第Ⅰ層とし、植樹したのではないかと明確な根拠はないが、憶測する。もう1本のトレンチ断面においても、同様の堆積が看取され、企画性が見られる。

調査のまとめ この調査において、本市に所在する数少ない野馬土手が消失してしまった事実は、誠に残念だが、堀及び土手の構築手順の一端に言及できた点は、不幸中の幸いであると思う。



第14図 野馬土手現況測量図

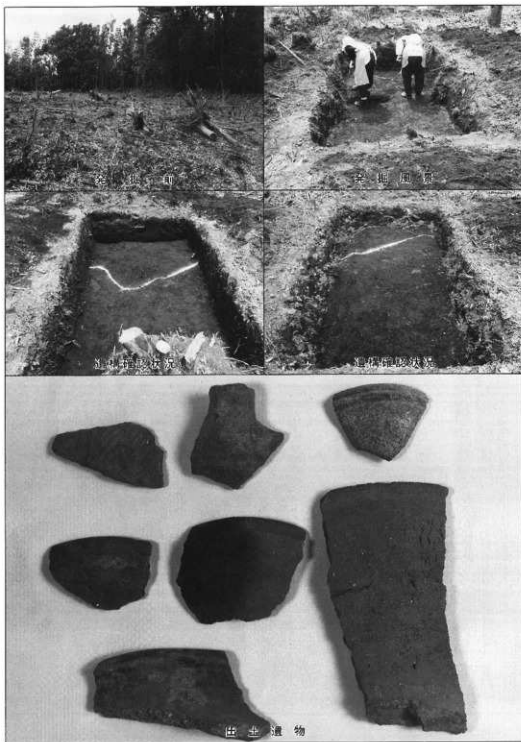


第15図 野馬土手土層断面図(1:60)

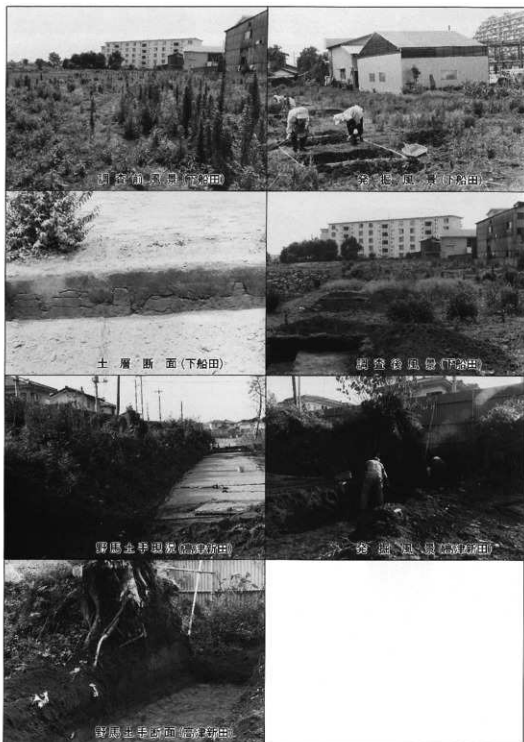
層 序

- I表 土 (木の根等による攪乱層)
 II黒色土 (腐食土層、よくしまっている)
 IIIA暗褐色土 (ローム粒、黒色土粒の混合層、黒色土粒若干多い)
 IIIB暗褐色土 (IIIA層に比べ黒色土粒の割合が少ない)
 IV暗黄褐色土 (ソフトローム層)
1. 黒色土 (しまりなくほそぼそ)
 2. 暗黄褐色土 (ロームブロック+ローム土、若干ほそぼそする)
 3. 褐色土 (ローム粒主体に黒色土粒少量含む。しまっている)
 4. 黒色土 (黒色土粒主体にローム粒ごく少量含む。非常にしまっている)

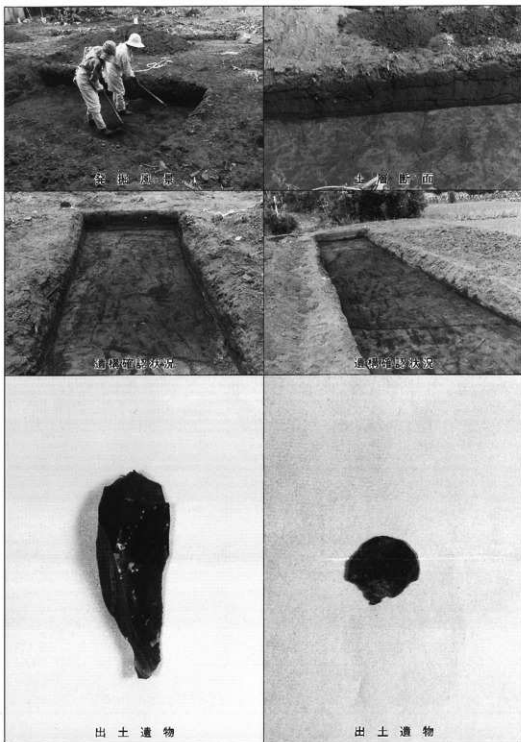
図版1 正覚院館址・持田遺跡



図版2 下船田遺跡・高津新田野馬土手遺跡



図版3 营地ノ台遺跡



図版4 桑橋新田遺跡



調査前風景



調査風景



遺構確認状況



遺構確認状況

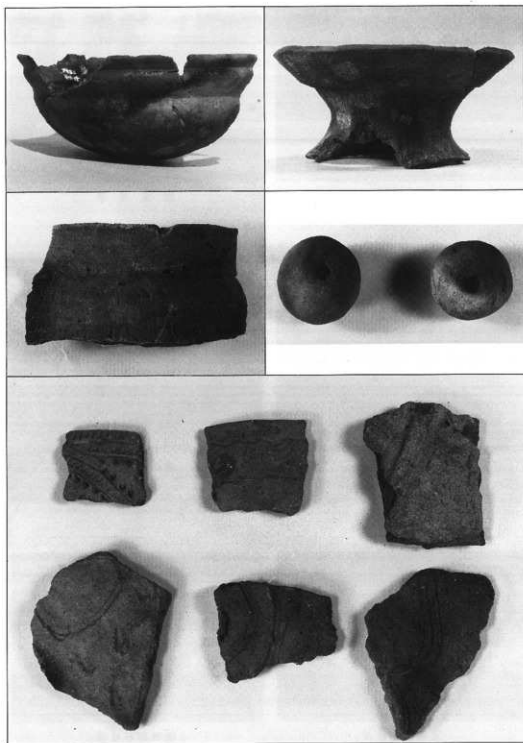


遺構確認状況



遺構確認状況

図版5 桑橋新田遺跡



出土遺物

調 査 組 織

調 査 主 体 者 大熊 章一 (八千代市教育委員会教育長) (平成4年4月1日~平成4年9月30日)
職員 謙吾 (八千代市教育委員会教育長) (平成4年10月1日~)

事 務 担 当 者 今井 利久 (八千代市教育委員会社会教育課長)
鈴木 賢治 (八千代市教育委員会社会教育課長補佐)
綱島 幹夫 (八千代市教育委員会社会教育課文化係長)
朝比奈竹男 (八千代市教育委員会社会教育課主事)
平山りえ子 (八千代市教育委員会社会教育課主事)

調 査 担 当 者 森 竜哉 (八千代市教育委員会社会教育課主事)

発掘調査補助員 寺島 稲子・花島あやめ・前嶋 京子・草薙 芳子・川上美津江・斉藤 節子
長岡 宣雄・長岡 かつ・渡辺 虎男・周郷ち似子・大谷 千鶴・遠藤 啓子
鈴木喜久子・蜂谷三枝子・岩井 英子・宮腰 和子・荒井 和子

出土遺物整理員 川上美津江・寺島 稲子・鈴木喜久子・前嶋 京子・草薙 芳子・斉藤 節子
宮腰 和子・荒井 和子・蜂谷三枝子・岩井 英子

千葉県 八千代市
市内遺跡発掘調査報告

印刷日 1993年3月26日

発行日 1993年3月31日

発行 八千代市教育委員会

生涯学習部社会教育課

〒276 八千代市大和田新田312-5

TEL. 0474(83)1151

印刷 株式会社印刷新報社